

日本学術会議哲学委員会 主催  
日本哲学系諸学会連合・日本宗教研究諸学会連合 共催

# 哲学なしで 生きられるのか

—大学における倫理・宗教・哲学教育の役割—

われわれの社会に哲学があることにどんな意義があるのだろう。大学教育のなかで哲学はどんな役割を果たすことができるのだろう。また、果たすべきなのだろう。

学術会議・哲学委員会は、2つの報告書、「展望」\*と「参照基準」\*\*を作成する過程で、これらの問いに答えようとしてきました。本シンポジウムでは、これらの報告書で表現された理念を実現するための課題と方法について、学識と実践に基づく情報交換と討論を行います。

昨今では、大学に哲学はいらないとか、それどころか文系はいらないといった組織見直し論も唱えられています。これを逆風ととるか、追い風にするか。哲学分野の諸学が力を合わせて次の一步を踏み出す機会として、本シンポジウムを開催します。

\*「哲学分野の展望—共に生きる価値を照らす哲学へ—」  
(2010年発表)

\*\*「大学教育の分野別質保証のための参照基準：哲学分野」  
(2015年作成中)

日時： 12月12日(土) 13:30~17:00

会場： 日本学術会議講堂

(東京メトロ千代田線「乃木坂」駅5出口徒歩1分)

司会	藤原 聖子 (日本学術会議第一部会員、東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
開会挨拶	岡田 真美子 (日本学術会議第一部会員、中村元記念館東洋思想文化研究所主任研究員)
趣旨説明	戸田山 和久 (日本学術会議第一部会員、名古屋大学大学院情報科学研究科教授)
第1部 報告	13:45~
報告1	河野 哲也 (日本学術会議第一部特任連携会員、立教大学文学部教授) 「哲学と人文社会学の明るい未来：これは皮肉ではない」
報告2	香川 知晶 (日本学術会議第一部連携会員、山梨大学大学院総合研究部医学域教授) 「医学のなかの生命倫理—倫理なしの医学教育?—」
報告3	竹村 牧男 (東洋大学学長) 「諸学の基礎は哲学に在り—「大学」における「哲学」の意義について—」
コメント	羽入 佐和子 (日本学術会議第一部連携会員、理化学研究所理事、前お茶の水女子大学長) 氣多 雅子 (日本学術会議第一部連携会員、京都大学大学院文学研究科教授)
第2部 討論	16:00~
閉会挨拶	戸田山 和久

## 哲学なしで生きられるのか—大学における倫理・宗教・哲学教育の役割—

日時：12月12日（土）13:30～17:00

会場：日本学術会議講堂

（東京メトロ千代田線「乃木坂」駅5出口徒歩1分）

### 哲学と大学教育

戸田山和久（哲学委員会委員長）

哲学系諸学の大きな特徴は、それが人類の知的活動のうち最も古くから行われてきたものを対象とした研究であること、そして同時にその知的活動の直接の継承者でもあるということにある。たとえば、プラトン哲学を研究している研究者は、プラトンの思索を歴史的対象として客観的に研究すると同時に、ある仕方ではプラトン哲学をさらに展開すること、または批判的に乗り越えることを目指している。このような意味で、この研究者はプラトンを引き継いで彼のやろうとしていた営みと同種のことをやろうとしているのだ、とも言える。哲学系諸学のこうした特徴は、一方で社会からの尊敬の源にもなってきたし、逆に揶揄の原因にもなってきた。

こうした特徴を持った哲学系諸学が、現代に生きるわれわれに懐古的関心を満たすこと以外の意義を持つとしたらどのようなものであろうか。哲学系諸学は、ものづくりや経済活動を通じて、社会にじかに富をもたらすという類の貢献はできないし、また期待されてもいない。しかし、そのないうる貢献の一つは、目には見えにくい、人類の生存と幸福にとってきわめて重要なものである。哲学系諸学が社会に貢献する最も重要な回路は、ひとをつくること、すなわち教育である。振り返ってみれば、孔子もソクラテスも、思想家・哲学者である以前に、偉大な教師だった。

では、哲学系諸学はどのような「ひと」を育てようとしているのだろうか、また育てることができるのだろうか。二つのことがらを指摘することができる。まず、哲学系諸学の教育は古今の哲学テキストに親しむことを不可欠の要素として含む（それだけに終始することはありえないし、あってはならないが）。学生は哲学の学習を通じて、人類が長い間取り組んできた根本的な問いに向かうことの魅力を知り、人類の知的遺産に対する畏敬の念を抱くだろう。また、過去の知的遺産をそれとして理解することに加えて、現代の諸問題や現代人の置かれた状況と関連づけながら学習を進めることによって、古代から取り組まれている問題の多くは、現代にも形を変えて存続し、自らの生とも深く関係する普遍的な問題であることに気づく。こうして、学生は自らもまた人類の知的遺産の継承者の一員であるべきことを自覚するだろう。つまり、哲学系諸学の育てようとする人は、まずもって人類の文明の継承者である。

哲学系諸学は、それが問題に取り組む際の思考様式によっても特徴づけられる。つまり、哲学系諸学は、問題をより原理的に、個人の利害を離れて普遍的に、できるかぎり共有可能になるような明晰さをもって、批判的に反省的に、他者との対話のうちに考えようとする。これらの思考の特質は、もちろん他の学問分野も共有している。しかし、哲学系諸学は、これらの特質をいささか過剰に、自覚的に備えた形で思考しようとする。こうした思考の特質と強度は、いわゆる「伝統的哲学問題」を考える場合だけでなく、われわれが自分たちの社会で出会うさまざまな問題を深く考えようとする場合に、きわめて重要なものとなる。哲学系諸学の教育はすべての学生にこうした思考のスキルと態度を与えるだろう。つまり、哲学系諸学の育てようとする人は、第二に、民主主義社会における熟議に参加し貢献できる人間である。哲学系諸学が、ほとんどすべての近代国家において、教養教育の中核をなすと考えられてきたのはこのためである。

とはいえ、以上の貢献は、哲学系諸学の教育が明確な目的を持って適切に行われる限りにおいて実現されるものに他ならない。だとするならば、哲学系諸学の教育・研究にたずさわる者の務めは、以上の理念をそれぞれの教育の現場でどのように現実化するかに知恵をしぼることだろう。学術会議・哲学委員会による「哲学分野の参照基準」の制定は、そのための試みである。それは、教育する営みである哲学の自己再定義の試みであって、決して哲学教育を一定の型に押し込めようとするものではない。また、この参照基準制定のプロセスそのものが、徹底した討論による原案作り、諸学会を通してのパブリックコメントの募集、それを受けての修正、公聴会の場での議論といった、すぐれて哲学的な対話の成果である。